の宗教と精神文化』新曜社、一九九七年）。
(3) 矢野敬一「祖先と記憶をめぐる政治と知の編成――国民道徳論と柳田国男――」（『浮遊する「記憶」』青弓社、二〇〇五年）。
(4) 国民道徳論については、鵜沼裕子「国民道徳論をめぐる論争」（『日本思想論争史』ぺりかん社、一九七九年）、津田雅夫『和辻哲郎――解釈学・国民道徳・社会主義――』（青木書店、二〇〇一年）、小股憲明『近代日本の国民像と天皇像』（大阪公立大学共同出版会、二〇〇五年）。
(5) 藤井健治郎『国民道徳論』（北文館、一九二〇年）一三頁。
(6) 同上、一四頁。
(7) 吉田熊次『国民道徳と教育』（目黒書店、一九一一年）一～七頁。
(8) 井上哲次郎『国民道徳論序』三省堂書店、一九二一年（『井上哲次郎集第2巻』、クレス出版）序。
(9) 同上、九八～九九頁。
(10) 同上、一四一頁。
(11) 同上、一九八頁。
(12) 新渡戸稲造『武士道』（岩波文庫、一九三八年）。
(13) 注(7)と同じ、二〇〇～二〇一頁。
(14) 同上、二〇六～二〇七頁。
(15) 同上、二六八頁。
(16) 吉田熊次『国民道徳と其の教養』（弘道館、一九二八年）、緒言。
(17) 森川輝紀『国民道徳の道』（三元社、二〇〇三年）一八〇頁。
(18) 深作安文『国民道徳要義』（弘道館、一九一六年）一三八頁。
(19) 同上、一五六～一五八頁。
(20) 注(3)と同じ。
(21) 益田勝美「『炭焼日記』存疑」（『柳田国男研究』筑摩書房、一九七一年）。
(22) 『柳田國男全集13』（ちくま文庫、一九九〇年）一二九～一三〇頁。
(23) 同上、二〇八～二〇九頁。

特集 慰霊と追悼

古代のカノンと記憶の場
――英国エセックス州における戦没者追悼施設を中心に

粟津賢太（あわづ けんた）

一 はじめに

本稿の目的は、英国における戦没者の追悼・記念施設の歴史的展開過程の一端を社会構成主義[1]の立場から考察することである。筆者は、中央の国家的な追悼施設について、これまでにもいくつか書いてきた[2]。そこで本稿では、地方における戦争記念碑や追悼式に関して、筆者が手に入れることのできた地方史の史料を中心として、戦争記念碑や追悼式といった記憶の場の成立の過程やその構成について考察し、さらにこの小さな事例をより広い理論的文脈へ結びつける可能性を考えたい。

英国における戦争記念碑（War Memorials）は多様である。その形態は大きく分けて像、塔、十字架などに分類できる。像にはギリシア・ローマの伝統が再び取り上げられ、聖ジョージなどの守護聖者や女神像が多く見られる。塔のタイプにはロンドンにあるセノタフに似た尖塔や円柱などが見られる。これら塔のタイプの記念碑にはエジプトやギリシアの影響が明白であり、その一方、ローマ以前のイギリスに存在した固有の文化であるとされた「ケルト十字」や、新たに創られた意匠である「犠牲の十字」、宗教的モチーフである「磔刑のキリスト像」までもがみられる[3]。また戦没者への敬意を表すために二分間の黙祷などが新たな国家的儀礼として創出された[4]。

しかし、この「伝統の創造」はまったくランダムなプ

ロセスであったわけではない。そこには独自の文化的コードが存在している。ホブズボウムが述べたように、「伝統の創造」とは「過去を参照することによって特徴づけられる形式化と儀礼化の過程のこと」[5]であり、英国の戦争記念碑の場合、それは古代帝国への参照であった。

若桑みどりは、西洋美術史のみならず表象文化論の立場から、西欧におけるこうした公共建築に見られる表象を分析して、ギリシア・ローマ時代にこれらの表象の原型が成立していたことを指摘し、それを「古代のカノン」であるとしている。カノン（正典）とは、特定のテーマとそのテーマを表現するシンボリズムが宗教画のイコンにみられるように定型化したものであると理解することができる。つまり特定の観念をイメージによって表すための一種の文法が出来上がっていたのである。[6] 少なくとも戦没者を追悼し記念する施設の場合、その意匠や象徴という点から考えるならば、この過去への参照は、まさに古代のカノンへの参照であったと考えられるだろう。

また、記念碑にみられるオベリスクなどの巨大な塔あるいは尖塔、標柱などの構造物は、人類文化のより根底的な次元、アーカイック（始原的）な存在を示唆しているかのようにさえみえる。これは宗教学者M・エリアーデのいう中心のシンボリズムであろう。中心のシンボリズムは、世界樹あるいは「世界の中心軸（*axis mundi*）」として太古の人類の持つ始原的な象徴であるという。垂直的に突出した構造物は天へと上る柱であり、天国、現世、地獄をつなぐ世界の中心軸である。[7] これらは国家主義的モニュメントとして、新たな国家あるいは帝国を荘厳し、可視化する象徴でもあったといえるであろう。

だが、考察はここでは終わらない。問うべきことはさらにある。もしもそれが正典であるならば、それは汎ヨーロッパ的なものなのであろうか。事実、西欧諸国のいずれのモニュメントにも古代のカノンをみることができるだろう。あるいはそれを塔などの建築物と考えるならば、帝国時代の日本が旅順や大連などに造った数十メートルに及ぶ忠霊塔などもある。[8] あるいは、靖国神社や明治神宮などを設計・建築した伊東忠太の仕事はいかに理解されるべきだろうか？それらは、より普遍的で、アーカイックなものと考えるべきなのだろうか。それともイデオローグの仕事なのだろうか。あるいは近代国家という制度に組み込まれた一種のパッケージであると考えるべきなのだろうか。

つまり問題は、仮に正典の利用が広くみられる現象であるならば、正典を使いながら、いかに民族や国民国家を表象するという個別性を獲得することが可能となったのか、という点にある。換言するならば、自国民と自文化の独自性と優越性を主張する観念であるナショナリズムと、国家を超えた共通性やなんらかの普遍性を持つと考えられるような正典との関係はいかなるものであり、いかなる過程によって生み出されていったのだろうか。本稿では、英国エセックス州における地方史史料によって、この問題を具体的に考えてみたい。

二　エセックス州立公文書館資料にみられる戦争記念碑関係文書

エセックス州はロンドンの北東、北海に面するドーバー海峡側に位置し英国防衛上、要の都市のひとつであり、レーダー施設の他、現在でも連隊の所在地であるコルチェスター市を擁する。また、コルチェスター市は、歴史記録上（History Registered）の最古の都市であることを誇っており、エセックス州自体も、歴史的資料保存に非常に力をいれている。エセックス文書館（Essex Record Office）ではよく整理された戦争関係の地方資料が文書やマイクロフィルム等で閲覧が可能であるし、膨大な日記類も参照できる。しかし、一口に戦争記念碑といっても、国家のもの、地方共同体、市町村によるもの、個人によるものと多様である。資料区分としては、それらは軍事、建築、教区、その他の地方誌の形に分類され保存されている。その意味で、地方における戦争記念碑に関する資料は、未整理のまま眠っているといえるであろう。[9]

これは国家レヴェルでも同じことがいえる。王立歴史文書委員会（Royal Commission on Historical Manuscripts）が管轄するthe National Register of Archives（NRA）では所蔵する二三九巻の報告書および四万一〇〇〇件の未刊行資料などが閲覧できる。具体的には